



岐阜天文台

正
村
一
人

昭和53年卒



岐阜市内勤務医を経て、昭和56年に正村歯科医院を開業。平成9年に岐阜大学医学部にて医学博士号取得。平成10年から財団法人岐阜天文台理事長、平成26年から公益財団法人岐阜天文台代表理事となり現在に至る。

はじめに

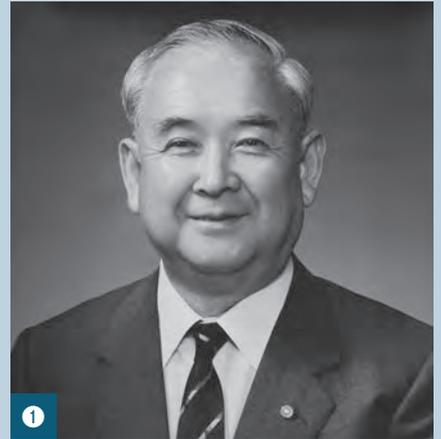
岐阜天文台は岐阜市西のほずれ、東海道新幹線羽島駅より北へ車で約15分の柳津町というところにあります。私の歯科医院は岐阜市の東のほずれにあるため、毎週1時間くらいかけて通い続けています。

私の父、正村一忠 (1) は生涯にわたり、市民科学者として天体観測、特に太陽黒点についての観測を行ないました。そして、多くの方々の協力のもと1971年2月、「天体の観測研究並びに一般への天文知識普及」を目的に私設の岐阜天文台を開設しました。同年7月に財団法人に移行して逝去するまでの27年間台長として活躍しました。私は1998年に後任の台長として就任し、父の教え子にあたる同年代の仲間とともに現在までの26年間、先代の遺志を引き継ぐ形で活動を継続しています（尚2014年4月からは特殊法人制度改革により財団法人から公益財団法人に移行して現在に至っています）。

岐阜天文台初代台長 父、正村一忠について

父はガラス片にススを塗って日食を見た小学生時代の出来事をきっかけに大宇宙の神秘のとりこになってしまいました。11歳で天文同好会会員、20歳の時には正村天体観測所を自費で作るとともに、岐阜城のある金華山山頂に、天文台を開台することにも尽力しました。

戦時中も戦地で夜空を眺め続け、終戦2年後に命からがら中国から帰還した父は、何とかして自分たちだけの力で天文台を作った



1
初代岐阜天文台台長
正村一忠 (1920年～1998年)

いと、父を中心に当時の岐阜天文協会に所属する会員とともに、10年の年月をかけ、現在の岐阜天文台が完成しました。

父は天文学の普及活動には人一倍熱心でしたが、自分の子供にあれこれ干渉することはなく、天文台に関することを押し付けることも一切ありませんでした。私父が行なっていることが桁違いに感じたため、近寄りたいたいと思うこともありましたが、そんな父が亡くなり、その後の26年間、私が台長を務めてこられたのは、私の中にも父に似た部分が少しはあるのかもしれない。

父は大変社交的で多くの人脈を持っていました。1972年、大学進学にあたり私は、父と交友関係にあった国立科学博物館の村山定男先生に保証人になっていただくこととなりました。当時、父は都合が悪く、18歳の私は一人で恐る恐る国立科学博物館に赴きました。その後、卒業を控えた私は再びお礼を言いに村山先生のもとを伺い「6年間一度も挨拶に来られず、申し訳ありませんでした」と伝え

会員往来

ると、「保証人という立場からすれば、寧ろ来てもらわなくてよかった」と言われたことを思い出します。また入学して間もなく、どのような経緯か定かではないのですが、のちの東京歯科大学学長松宮誠一先生が、当天文台の見学に来られたこともありました。父が、いつ、どのような経緯でこのような方々とコンタクトを取り仲良くなっていったのか、携帯電話やSNSも存在しないあの時代にどうやって…本当に不思議な人でした。

岐阜天文台について

元来、天文台は天文研究を行う専門施設で、一般の人々は利用できませんでした。そのため観測条件を考慮して山頂等に作られることが常でした。父は「当天文台は学生及び一般の方々が気軽に



2

利用できる施設にしたい」と考え、当時の夜空の状況を考慮した上で珍しく平地に建設しました。

(2)

開台以来54年目を迎えることができ、現在に至るまで来台者は約600,000人に達しています。最近では家族3代にわたり来台されて

いる方もおられます。

当天文台には日本光学製（現：ニコン）25センチ屈折望遠鏡があります。屈折望遠鏡としては国内最大級であり口径25センチセミアポクロマートレンズは名実ともに世界的にも有数のもので、半世紀経った現在でもその地位は変わっていません。(3)

ここで当天文台の事業をご紹介します。

★一般公開（無料）

一般公開は毎月2回、第1土曜日と第3土曜日、その他随時実施しています。天気が良ければその季節の天体を直接望遠鏡で観測できます。

★天文教室

小学校高学年から大人を対象とした天文教室は今期で54年目に入っています。現在は毎月第3土曜日の午後6時～9時に開講しています。講座ではその年に見られる天文現象や望遠鏡の取り扱い方、季節に見ごろを迎える星座、星雲、星団についてわかりやすく

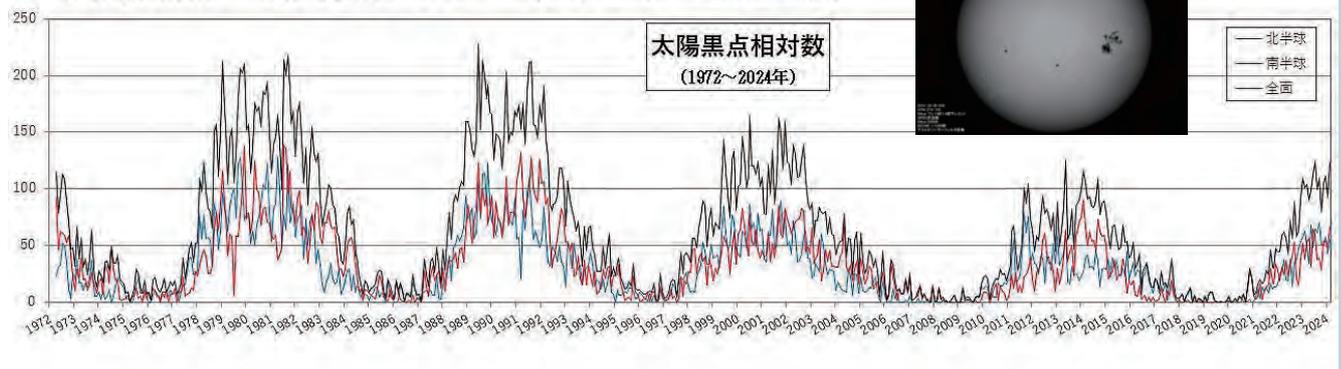


4



3

太陽黒点 相対数グラフ (1972年～2024年)



解説しています。最近ではスマートフォンを用いた天体写真の撮影法などを解説、実演して受講者に楽しんでいただいています。(4)

★小学校、中学校、大学、公民館等 での天文学講座や親子天文教室

柳津町公民館講座では年に2回50年以上継続して天文教室を行っています。また、岐阜市内にある中学校の生徒への天文教室は地元のロータリークラブの事業として毎年11月に行われ45年間継続されています。

その中で大学に天文学講座を開く契機となったお話をします。以前から隣接する聖徳学園大学の学生がよく天文台に遊びに来ていました(聖徳学園大学は県内で多くの教員を輩出している大学です)。その際、天文台のスタッフが大学の授業とは関係なく興味のある学生に天文学の講義をしていました。それをきっかけとして大学の教務課から正式に一般教養科目として天文学を教えるほしいという依頼がありました。当天文台評議員の浅田英夫氏に大学の講師をお願いし、平成28年から看護・教育・外国語の学部生に対して授業を行なっています。年に何回か

は課外授業として当天文台で講義をすることもあり、実習の場として活用されています。

★図書室

天文図書を中心とし、蔵書総数は約15,000冊になります。尚、当天文台では多くの観測研究者の観測資料及び蔵書が故人となられると散逸するおそれがあるので、努めて蒐集を目指しています。

★天体観測

当天文台では太陽、星座、星雲・星団、月及び惑星の観測を行っています。この中でも、父は太陽黒点の観測をライフワークとして、口径2.5cmの小さな望遠鏡で観測をスタートさせた1930年代からの黒点観測記録が残っています。2023年には名古屋大学の早川尚志高等研究院特任助教が当台を訪問され、父の太陽黒点観測データを調査されました。世界標準として公開されている黒点相対数の較正に役立つとのことでした。当天文台評議員の早水久雄氏により観測は継続され現在に至っています。

黒点は周りより温度が低く、強い磁場に満たされた場所です。

(5) その大きさは絶えず変化し

ていて、一般的に黒点の数が多き時は太陽活動が活発となり、太陽から受け取るエネルギーは増えます。反対に、黒点の数が少ない時は活動が弱まります。グラフから11年の周期で繰り返されることが分かります。(6) 尚、今年(2024年)は太陽の活動が活発な時期にあたります。

★周辺機関との事業協力

岐阜市科学館、西濃尾プラネタリウム等の事業に協力して県内の天文知識の普及を図っています。平成21年から現在に至るまで岐阜市科学館との連携事業としてスタンプリーを実施しています。(7)

また、教育研究機関をはじめ、学会・学術団体、博物館、出版・報道機関、行政機構へ資料交換(提供)も行っています。



星空散歩★



アンドロメダ座大銀河 M31

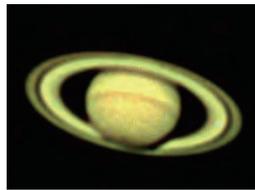
我が銀河系の隣にある銀河で、秋の夜空に肉眼で確認可能



火星



木星



土星

当天文台撮影の写真をご紹介します。



いっかくじゅう座
バラ星雲
オリオン座の左にある散光星雲で撮影すると水素ガスが出す光で赤く写る



プレアデス星団
日本では「すばる」で親しまれている

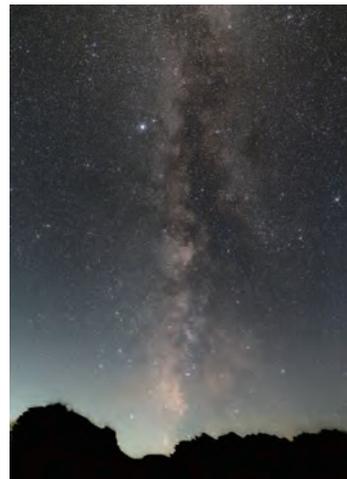


北天の
日周運動



オリオン座大星雲 M42

冬を代表する星座、オリオン座にある星雲



天の川

天の川は星の大集団である我が銀河系の姿で、夏の天の川は銀河の中心方向にあたるため見頃である



岐阜城と月

(※合成ではありません)
岐阜市金華山山頂にある岐阜城と月のコラボ写真はここ数年ブームになっており、ポイントには100人以上のカメラマンが集まることも

最後に

街そのものが明るくなり、パソコン・ゲーム・スマホで近くの明るいものを見る機会が格段に増え、星を見る環境も少なくなりました。そういう私も毎日、拡大鏡をつけながら口の中の小宇宙とにらめっこする毎日です。そんな中でも、私の診療所が田舎にあるせいかもしれませんが、診療を終え

て余力のない体で診療室を出た時、夜空を見上げれば、そこには変わらず先人が思いを馳せた数限りない星屑が広がっており、心が開放されるような気分になります。それと同時に、不思議な安堵感に包まれるのです。

最近は調べたいことがあれば、インターネットを通じて簡単に画像や動画付きの情報を手に入れら

れる時代になりました。そんな便利な時代であっても、実際に観察したい物のある場所に『直接』赴き、『直接』自分の目で見る、という体験は記憶に残る最も有効な手段だと思えます。皆さんもまずは夜空を眺めることから始めて、空の風情を感じてみるのはいかがでしょうか。